



「やまがた宝さかし」は県民の「宝」を取材、表現する東北芸工大情報計画コースの演習。この欄は同コースの学生たちが編集した。

ギャンパス発



「あきらめないことが大切」と語る鈴木さん

のどかな田園風景に囲まれ、生徒たちが元気に授業や部活動に取り組む、高畠町の県立高畠高校。1922年に創立され、県内外に多くの人材を送り出し始めたこの伝統校で、剣道部の顧問として忙しい日々を送るのが、保健体育の教諭である鈴木愛梨さん(23)です。

鈴木さんが剣道を始めたのは、小学2年の時です。剣道をやっていた父や兄の背中を見て、自然と竹刀を手にしたそうです。高校は剣道の強豪校として知られる県立左沢高校に進み、親元を離れ寮生活を送りましたが、木刀練習がつらく家が恋しくなることもありました。唯一の連絡手段だった公衆電話で家

に取り組む、高畠町の県立高畠高校。1922年に創立され、県内外に多くの人材を送り出し始めたこの伝統校で、剣道部の顧問として忙しい日々を送るのが、保健体育の教諭である鈴木愛梨さん(23)です。

鈴木さんは、高校1年の時に出場したインターハイです。会場の長崎まで、両親は車で何十時間もかけて応援に駆けつけてくれましたが、九州という初めての土地での大きな舞台に緊張してしまい、30秒もたたないうちに負けてしまったのです。いつもは試合前と試合後に、応援してくれる家族や友人の顔を一人一人確かめるのが常だったのですが、そのばかりは、わざわざ遠くから応援に来てくれたのに申し訳ないと、皆の顔を見ることができませんでした。

試合前に応援してくれた家族や友人の顔を一人一人確かめるのが常だったのですが、そのばかりは、わざわざ遠くから応援に来てくれたのに申し訳ないと、皆の顔を見ることができませんでした。

後進にも広がり続け

みが、今も脳裏に焼き付いているそうです。そしてその時、自分自身のために勝つのではなく、この笑顔を見るために頑張ってきたのだ。それが自分にとって、何よりも大切な笑顔でした。練習がつらく家が恋しくなることもあります。鈴木さんは、周囲の人と培ってきた笑顔のつながりは、今も広がり続けています。

(担当=佐藤香帆、中野沙紀、今田隼人、色摩和哉、浅野亜由美、近藤利行)

■あなたの「宝」教えてください 何気ない生活の中で見つけた大切なものの、そんな存在を「宝」として募集しています。問い合わせは、東北芸術工科大学情報計画コース「やまがた宝さがし実行委員会」(023・627-2170)。

鈴木愛梨さん(米沢市)の

剣道で生まれる笑顔

族の声を聞き、励まされ元気をもらつたといいます。

鈴木さんにとつて忘れられないのは、高校1年の時に出場したインターハイです。会場の長崎まで、両親は車で何十時間もかけて応援に駆けつけてくれましたが、九州という初めての土地での大きな舞台に緊張してしまい、30秒もたたないうちに負けてしまったのです。いつもは

そんな苦い経験を経てから高校3年のインターハイでは見事優勝を果たしました。決勝戦が終わり、相手に礼をしてから戻ってきたときに目に入つて来た家族や仲間、監督の満面の笑みが、今も脳裏に焼き付いているそうです。そしてその時、自分自身のために勝つのではなく、この笑顔を見るために頑張ってきたのだ。それが自分にとって、何よりも大切な笑顔でした。

現在、鈴木さんにとって笑顔は、自分の試合のときだけではなく、体育の先生や剣道部の顧問という立場においてもかけがえのないものです。授業中に「これができなかつた」という生徒にうまくポイントを教えて、次の時間に「できたよ」と笑ってくれると、自分自身も笑顔になります。鈴木さんが周囲の人と培ってきた笑顔のつながりは、今も広がり続けています。

鈴木さんは今、そんな信念を若い部員たちに受け継いでもらおうと、日々の指導に臨んでいます。

現役選手としていつまでも試合に出続けたいと語る鈴木さん。試合によって両親を日本中の色々な所に連れて行くことが、何よりの親孝行なことです。